

りゅうおうが生まれた日
〈前編〉

白鳥士郎

雪の列車

「すごい雪ね……」

トンネルを抜けると、そこは銀世界だった。

「ねえ見て八一。こんなに積もったのを見るのなんて何年ぶりかしら？ 大阪じゃあ雪なんてめったに積もらないから——」

そう言いながら隣の席を見ると、

「……………すびー」

寝てやがった。

「こーら」

「らっっー！」

私がそいつの鼻の頭を指で弾くと、目尻に涙を溜めて跳ね起きる。

「な……………なにすんのさ姉弟子!？」

「いま寝ると、夜に眠れなくなるわよ？」

「ね、寝てねーし！ 脳内で詰将棋解いてましたし！」

バレバレの嘘。昔から言い訳はこればかりだ。

「じゃあ一緒に解いてあげる。どんな問題？」

「え？ いや、ええつと……………」

「ど・ん・な・問・題？」

「……………寝てました」

「よろしく」

私は座席の前にあるネットの中に突っ込んでいた飲みかけのペットボトルを取り、蓋を開けて差し出す。

「ほら。水飲んでシャキッとしなさい」

「……………それ、姉弟子が口つけたやつ……………」

「不服？」

「……………頂戴いたします」

のろのろとした動作で私からペットボトルを受け取ると、口をつけてごくごく飲む。飲み干しそうな勢いだ。

十年近く同じ家で、本物の姉弟のように育った私達にとって、ペットボトルの回し飲みなんて特に騒ぐようなことじゃない。

九頭竜八一。

私の隣で眠そうな顔して水を飲んでるこいつが、今回の主役。

正確には主役の一人だ。

わずか十六歳のこいつと、もう一人の主役のために、私達はこの大雪の中、はるばる北陸まで移動している。

目的地は石川県の和倉温泉にある高級旅館『ひな鶴』。

そこで行われる将棋のタイトル戦に、八一は挑戦者として登場するのだ。

『竜王戦』

将棋界の最高位に在るそのタイトルは、プロ棋士だけではなく女流棋士やアマチュアも含むあらゆる人間に獲得のチャンスがあるオープントーナメント。

一年に一度、人類で最も将棋の強い者を決める戦いだっただ。

「……んで？ 姉弟子、なんですって？」

水を飲み干した八一が、張りの戻った声で聞いてくる。

「外。雪」

指で窓をコンコンと叩きながらそう言っていると、

「ああ？ ……うわっ！ すげッ!! な、なんじゃこりゃ!?!」

八一は窓に向かって身を乗り出す。

必然的に、私に覆い被さるような感じになった。

「ちょ、ちよつと八一。邪魔……」

「うっわー、今どこ？ 芦原温泉くらい？ こりゃ山の方はもつと酷えぞ……」

「そういえば八一の実家ってこの辺りだっけ？ 会場にも近いの？」

「うちは福井でも奥越つていつて海から離れた場所だから、どっちかっていうと石川より岐阜に近いんだけどね」

「名前だけで山奥ってわかるわね」

「……今日の前夜祭からうちの家族が親戚一同連れて来るって話だったけど、これちよつと無理っぽいなあ」

雪の勢いはどんどん増してきていて、今はもうほとんど景色も見えないくらい。

八一は席に戻るとスマホを取り出して操作しだす。

実家と連絡を取っているんだろうか。

「いいじゃない来られなくても。逆に煩わしくなくて」

凝り固まった爪先を伸ばしながら私が言うのと、

「それもそうなんだけどね……」

「気になるわよ？ 親が対局を見に来ると。自分の知らない場所で新聞とか観戦記者に何か変なこと話してるんじゃないかって」

「ははっ。なるほど」

八一は軽く笑う。スマホをいじる手は止めない。

「……」

私はちょっと唇を尖らせると、溜め息をついて、ゆったりとした椅子に座り直した。

——つまらないな……。

普段なら弟弟子おとうとのこんな態度は許さない。

私がしゃべりたい時は一緒にしゃべり、私がスマホを操作してる時は行儀良く待機。それが弟弟子として当然の態度。

けど今日は弟弟子おとうとが主役だ。

移動中からもう、こいつが気持ち良く対局できるような最大の配慮がされる。

大阪から石川県の和倉温泉まで私達を運んでくれる特急列車の座席はもちろんグリーン車。

私がこうして隣に座ってるのも八一をリラックスさせてやるためだし、近くには将棋関係者や報道関係者が固まって座っている。通路を挟んだ隣の席には、私達の師匠も座っていた……

ビール飲んで寝てるけど。

東京とうきょうからも同じように、タイトル保持者ホルダー——竜王を中心とした一団が移動中のはずだった。

私も自分のスマホを取り出して竜王戦の中継ブログにアクセスする。

タイトル戦は写真などをアップしてその様子を伝える中継ブログや、将棋の指し手をリアルタイムで伝える棋譜中継、それに対局室の映像やプロ棋士による解説を行うニコニコ生放送等、中継が充実している。

特に中継ブログは前日の移動の様子からアップされることが多い。観戦記者も同行している

からだ。

この列車にも関西の観戦記者が同乗している。

——もしかしたらアップされているかな？

そう思って記事を見ていくと……あった。

『挑戦者も大阪を出発』

そんな見出しと共に、大阪駅のホームに立つ八一や師匠の写真がブログに貼られている。私の横顔のアップもあった。

「5つの間に……」

『絶大な人気を誇る《浪速なにわの白雪姫しらゆき》空銀そらぎん子女流二冠。この第七局では師匠の清滝きよたき九段と共に現地での大盤解説を担当する』

写真の下にはそんなコメント。

——まったく、油断も隙も無……。

そう思ってブログを読み進めていくと、さらにこの列車の中から投稿したらしい記事もあった。

『北陸は雪景色』

そう題された記事を開いて見た私は、そこに上がっていた写真を見て絶句する。

「っ……!!」

そこには——たった今、私と八一が窓の外の雪を見ていた写真が貼ってあった。
こんな説明と共に。

『身を寄せ合って窓の外を眺める挑戦者と空女流二冠。外は寒いがこちらはアツアツだ』

「な……なによ、これ……!?!」

私は思わず立ち上がり、近くに座っているであろう観戦記者を探す。

……いた。

記者の鶴さんは私と目が合っても悪びれもせず、それどころかこっちに向かって手をひらひらと振っている。

確信犯だ。

「あのアマ……!」

「姉弟子？ どうしたんです？」

「ッ!? な、なんでもないわ……!」

私は慌ててスマホの電源を落とす。

記者を怒鳴りつけて記事を消させたい……が、こんな記事に動揺していると八一に知られるのはもつと癪。

八一から顔を逸らして窓を見る。そこに映った自分の顔を確認。

目立つほど赤くなっている……よし。

「何でもないわよ？ それより自分の心配をしたら？」

不思議そうな顔でこっちを見る八一に、私は言った。

「第一局の時みたいに一日目の午前中から爆睡ばくすいなんてことになったら、また袋叩きに遭うわよ?」

「あ、あれは……前日に興奮しすぎて一睡もできなかったから……今はもうタイトル戦にも慣れたし大丈夫ですって」

「第二局は一日目が終わったときに竜王の草履ぞうりを間違えて履いて部屋まで帰って批判されたわよねえ?」

「う……」

「第三局は扇子せんすの音がうるさいって相手から抗議されて、ネットでも『扇子DJ』とか書かれて叩かれてたし。第四局は指し手が乱れて相手の駒まで歪めちゃったのをそのまま放置して、相手もそれを直さなかったから、みんな将棋の内容よりも『どっちが直すんだ?』っていうほうが気になって大炎上してたわよね？ もちろん八一が悪かって方向で。第五局は——」

「もういいでしょ姉弟子!？」

悲鳴を上げて耳を塞ぐ八一。勝った。

「うう……明日対局なのに銀子ちゃんがいじめる……」

そう言って座席にうづくまる八一を見下ろしながら、私は満足感に浸っていた。

私達の関係はこうでなくちゃ。

「私は別に八一の応援団として同行してるんじゃないし？ お仕事として行くんだから対局者

双方に公平に接さなきゃね」

「だったらせめて黙っててくれませんかねえ!？」

「それは嫌」

「なんで？」

「だって退屈じゃない」

「……俺は暇潰しで罵倒されてたのか……」

ずるずると椅子に崩れ落ちる八一。ふふ、勝った。

私の名前は空銀子。

どこにでもいる中学二年生の女子……とは、言えないだろう。

将棋連盟関西本部に所属する奨励会員にして、女王・女流玉座の二冠を保持する女流タイトル保持者。

ル保持者。

そして、この八一の年下の姉弟子だ。